

図書館通信

第 3 号
R06.10.24
美和高校
図書部

文化祭での図書館



文化祭からもう2か月が過ぎようとしています。文化祭、その後、図書館に来てくれましたか？文化祭では、3年生図書委員による企画「犬の世界はワンダフル」の展示を行いました。現在も図書館入口に展示しています。（11月初旬、展示入れ替え予定です。お早めに来館を）

また、「雑誌バックナンバー譲渡会」を行いました。本校の雑誌譲渡のリユース活動は、平成27年から実施されている企画です。44名の応募があり、156冊が配布されました。特に『オレンジ・ページ』が大人気でした。大人の雑誌『サライ』も渋好みの美和高生が応募していました。今年、応募できなかったあなた、来年はぜひ応募してみてください。



全国読書週間「お楽しみ抽選会」

10月28日～11月8日！

読書の秋！秋の夜長に読書してみませんか？



今年もこの期間中に図書館の図書（漫画は除く）を1冊以上借りた生徒に「抽選券」をお渡しします。

＊右の写真のような展示してある景品から欲しい景品を3つ(第1希望から第3希望)選んで番号を記入してください。

＊一人につき1回の抽選チャンスです。重複した応募は無効になります。

＊期間後抽選→当選した景品をプレゼントします。

＊当選しなくても必ず何かもらえます。本を借りて、抽選券をゲットしましょう。



＊厳選なる抽選の結果は景品の発送をもってかえさせていただきます。

読書感想文コンクール結果

今年も1・2年生の皆さんに読書感想文に取り組んでもらいました。普段、本と縁遠い人も、自分自身で一冊を手に取りページを開くという「本との出会い」の瞬間を経験できたと思います。

ステキな本と出会えましたか。



最優秀賞作品は「第69回青少年読書感想文全国コンクール」に応募しました。裏面に全文を掲載しましたので、読んでみてください。

最優秀	2-3	幸せの尊さ
優秀	2-4	偏見からはじまる差別
	1-3	夢追う彼に憧れて



みーくん

☆ 読書感想文最優秀作品

「幸せの尊さ」 書名：汐見夏衛『あの花が咲く丘で、君とまた出会えたら。』

戦時中の日本。人々は「お国のために」と働かされ、食べたいものも満足に食べられなかった。いつ攻撃が来るか、分からない恐怖に脅かされながら一日を過ごしていた。私とたいして年が変わらない人たちが戦地へ投げ出された。そんな思わず目を背けてしまうような過去が、そこにはあった。

『あの花が咲く丘で、君とまた出会えたら。』この本は、目が覚めると戦時中の日本にタイムスリップしていた中学生の百合が、そこで出会った彰の優しさにどんどん惹かれていく物語だ。しかし彼は特攻隊員で、命を懸けて戦地へと飛び立たなければならなかった。読み進めていくたびに、私はどんどん物語に引き込まれていった。それと同時に、今ある生活が全く当たり前ではないことを改めて実感させられた。

特攻隊員として戦地へ飛び立たなければならなかった人たちも、現代を生きる私たちと同じように誰かを愛していたはずだ。また、彼らを愛する人だっていたはずだ。誰一人として彼らの「死」を心から望む者などいなかった。いつの時代でも、命は軽視されるべきではない。作中では家を奪われても、家族の命を奪われても、「仕方がない」と受け入れる人々を理解することができない百合の心情が描かれていた。また、彰たち特攻隊員の出撃命令が出たときの「おめでとう」や「ありがとう」の言葉、愛する人のために特攻を免れようとする人が罵倒や軽蔑をされる風潮を百合が理解できないのも、現代を生きる私たちが平和な時代に生まれ、何ひとつ不自由なく暮らせているからなのだと思う。

「出来ることならば戦争のない時代に生まれていたのならば君と一生を共に過ごしたかった」

現代に戻った百合が社会科見学で訪れた、「特攻資料館」で見つけた手紙。それは、出撃前の彰が書いた、百合宛の手紙だった。そんな手紙に記されたこの一文に、私の心はひどく締めつけられた。それと同時に、この手紙を読んだ百合の彰を想う気持ちが溢れる描写に私は強く心を動かされた。彰は特攻隊員として、国のために命を捧げることをとても誇りに思っていた。そんな強く、優しく、誠実な彰を百合は愛していた。それは彰も同じで、素直でまっすぐで優しい百合のことを彰は心から愛していた。

「自分はこんなにも愛されていたんだ。」

百合がそう気づいたとき、私は自然と、自分の生活を思い返していた。私にはもう二度と出会うことができない人を愛した経験などない。どれだけ会いたいと願っても、愛する人に会えない辛さなど今の私にはきっと理解し切れていないと思う。だから、私は一生をかけて理解していかなければならない。若くして飛び立たなければならなかった特攻隊員にも守りたいものがあつた。そんな彼らが命がけで守ってくれたもの。つまり今、私たちが生きている現代の日本だ。私たちが今、安心して眠りに就くことができ、好きなことを学べ、好きなものを食べられる幸せ、当たり前のように明日が来る幸せは、自分の命を犠牲にしてまで日本の未来を守ろうとしてくれた人たちのおかげだということを忘れてはいけない。そして、私たちが普段何気なく過ごしている日常の中に転がっているたくさんの幸せに日々感謝しなければならない。私たちはこの気持ちを常に心に留めながら生きていかなければならないのだと強く実感した。

今年の修学旅行で私は広島県原爆ドームに足を運ぶ。そこで私はきっとこの物語を読んで得た知識をもとにつくりあげた自分の中の戦時中の日本をはるかに上回るような本当の戦時中の姿をこの目で見て、感じることになる。当時の日本の様子、人々の表情、これらを実際に目のあたりにしたとき、私は何を思うだろうか。怖いと感じ、見続けるのが辛くなってしまふかもしれない。きっと目を背けてしまふ。私は今までも色々なことから逃げ続けてきた。でも、こればかりは逃げてはいけないと思う。目に、記憶に、しっかりと焼きつけて、過去と向き合わなければならない。それができてはじめて、今ある生活のありがたみを実感することができると思うからだ。

この本を通じて改めて、私は幸せなのだと思います。今、学校に行くのがだと愚痴を言い、勉強なんてしたくないと不満に思う日々はかつての人たちがどれだけ願っても叶うことのなかった「幸せ」なのだ。

だから私は今日も、たくさんの人が命を懸けて守り抜いてくれた、今ある世界を精一杯生きていく。

